
逃走中のモラトリアム

ぐり太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃走中のモラトリウム

【Nコード】

N4041Z

【作者名】

ぐり太

【あらすじ】

家出少年の鈴木 誠は血を吸う化け物、吸血蜥蜴に襲われてしまう。

彼を救ったのは大剣を携えた防人の少女だった。

初投稿です。

未だにサイト機能を理解出来ていないのでちよくちよく更新していきます。よろしく願います。

出来る限り定期的に長く続けていければなと思っています。

1(1) 家出少年

「所詮これも、ただの娯楽って分かってんだけどさ」

繁華街のビルの狭間で鈴木 誠は一人ため息を吐く。

時刻は午前零時を回ったばかり。

Yシャツのボタンを外し、息を整える。足下には真新しい紺色のナイロンバックが置かれていた。

合成革の靴の中では足の裏が悲鳴を上げている。

だが、これで逃げ切れとは思えない。

奴らの鼻は相当なものだ。誠があの場合から逃げ出してたった数時間。特にマラソンの訓練も積んでいない一介の未成年を奴らが捕まえることなど、容易に想像出来た。

奴ら、生き血を貪る化け物共にとっては

それでも逃げているのは、一縷の望みを誠が抱いてしまったから。化け物から逃げ出し、自由になる望みを。

「君、ちよつといいかな？」

巡回中だったのか、制服を着た細身の警察官が誠に声をかける。

「それ、西高の制服だよね？ 条例で二三時以降の外出は禁止されてんの知ってるかな？」

知っている。が、今は逃げることで精一杯。

警察に構っている場合ではなく、誠は悲鳴を上げる足に鞭打って走り出す。

折角作った時間が職質なんかで潰されるわけにいかない。が、

足が空回りしたかと思った瞬間、誠の上体は壁に打ちつけられた。鈍い音と共に衝撃が全身を駆けける。

警官に襟首を掴まれそのまま壁にぶつけられたのだ。

警官がそんなこと普通するか？　と言うか、いくら何でも男一人を片手で軽々と持ち上げることが出来るものではない。

イヤな予感が頭を駆けめぐる。

「逃げちゃダメでしょー、鈴木　誠君。ここは大人しく補導されなきゃー」

「…コスプレが趣味とは、人生楽しんでますことで」

大きな口を歪ませて笑う警官に誠は見覚えがあった。

今逃げなきゃならない相手。人外の狩人達の一人。

「様になつてるでしょー？　気に入ってんだよねー、この姿なら職務質問って形で若い娘に声かけてー、お持ち帰り出来るしー」

確かに、高校生が私服で夜中出歩く事なんてこの街では珍しくない。誠もそんな少年少女の中に溶け込もうとした結果、今に至るのだが。

「女の子のそれは美味しいけど、どこか物足りないと思ってたんだよねー。あの方のお気に入りのお誠君ならー、たいそう美味しいと思うんだけどー」

「知りませんよ、あんたらの味覚なんて」

壁に顔をこすりつけられたまま、更に襟首を持ち上げられる。

細かい凹凸のある壁で誠の頬から血が滲む。

「あの方は優しいよねー。誠君、君がそう言われてられるのもあのお方が寛大な御心を有しているからって知ってるー？

僕みたいに見えの狭い者にはお前が言葉を喋ることすらおこがましく感じるんだよねー」

警官の歪んだ口元が釣り上がり、鋭い犬歯が覗く。

ファンタジーでは御定番の吸血鬼のそれとまったく同じ、人の生き血を吸い取る牙。

「いいんですか？　俺、あいつ様のお気に入りなだけど？」

返事が来ない。

警官は誠を一瞥すると、汗と埃にまみれた少年の首筋に牙をたてた。

痛みと共に、視界が霞む。

所詮これも、奴らにはただの娯楽。毎日化け物に血を奪われるのが誠にとつての日常。

日常から抜け出そうとした先でも結局日常の延長線で奴らは待ちかまえ蹂躪される。

分かっている。分かっている、それでも

世界は異物に蹂躪される事を良しとしていても、人はそれを認めはしない。

風に乗った異物の臭いを感知して数時間。雑居ビルの屋上に立つ彼女は、大元の臭いに辿り着けたと確信する。

ここ数ヶ月、街では行方不明者も含めば十数人が被害に遭っていることだろう。

人を喰らう戎、吸血蜥蜴に

いつ現れたのか定かではない。最初の文献では平安の頃にはそれらしい記載も有るらしいが少女にとってはどうでもいい話だ。

結局の所、奴らを倒せばそれでいい。

古代の文献も、彼女には化け物退治をするための資料でしかない。自らの並外れた能力も、道具として役立てればそれでいい。

元より望んで手に入れた力でもないのだから。

「ムカツクわ、相変わらずさあ」

歯ざしりをして少女は屋上から飛び降りる。

力無く落下する少女の目は鋭さを宿し、地上で生き血を貪る戎を捕らえた。

何が起こったのか、誠には理解出来ずにいた。

押さえつけられていた化け物の力からふと解放されたかと思いきや、目の前は鮮血の海。地面には警察官のコスプレをした化け物の残骸が転がりわずかに痙攣している有様だ。

そして何故か、自分同様な、それ以上に化け物の血にまみれた少女が無造作に大剣をぶら下げて佇んでいた。

> i 3 7 1 7 5 — 4 5 4 3 <

緩やかにカールのかかった肩までの髪も、黒で統一されたランニングウェアも化け物の血で赤く染まっている少女は、化け物が動かなくなつたのを確認してから誠に顔を向ける。

幼さの抜けきらない、それでも鋭さを兼ね備えた少女は奇異な目を誠に向ける。

「何お前、さつさと逃げたら？」

大剣を引きずる少女は誠になどお構いなしに脇のポケットから白い紙を取り出して壁や床に貼り付けていく。

「早く来ないかな、あの人」

ため息混じりに少女は作業を続ける。どうやら、誰かを待っているみたいだ。

「あの、助けて頂いて…ありがとうございます」

誠の礼に少女は「どーいたしました」と作業の手を止めることなく気のない返事をする。

完全に誠のことなど頭に無いようだ。

が、誠の次の言葉で少女は完全に動きを止めた。

「好きです、付き合ってください！」

長い沈黙。

「……………はあ？」

口火を切ったのは少女の侮蔑の声だった。

「一目見て好きになりました！ 結婚を前提にお付き合いして下さい！」

少女の小さな肩を両手でしっかりと握り詰め寄る誠。

「指輪はまだ無いけど、式は神前、教会、どっちにする？」

ああ、人前式つてのもあったな。

ウエディングドレスは君のかわいらしさをより際立たせてくれると思うんだけど、ああでも角隠しも似合いそうだし！

ともあれ、今は二人で誓いの口づけを」

「今死ぬか？すぐ死ぬか？」

冷めた目で誠の眉間に切っ先を突きつける少女。

慌てて誠はゴキブリみたいに後ろに後じさる。

「ゴメンゴメン、そうだね、やっぱ最初は俺の燃える愛の証としてホテルで一発」

「死ね外道ー！」

誠が言い終わる前に少女は大剣を振りかざす。

「わー、暴力反対ー！」

すんでの所で避ける誠を少女は執拗に追いかける。

「賑やかねえ、りんどうちゃん」

通りの方からふんわりとした声がかかる。

二人が振り返ると女が佇んでいた。

少女とは反対にカジュアルな白いロングドレスを着た女。

声音通りの優しい顔立ちは二人に笑みを向けている。

垂れ下がった目尻がやけに色つぽい成熟した女性は、裾が汚れるのも気にせず血まみれの通路に入っていく。

「サツキさん、これ殺していい？」

少女、りんどうが大剣を誠に向ける。一方の誠は自分に向けられた刃など気にもせずに陽気な声を少女に向けた。

「もう、りんどうさんって言うの？ 顔に似合ってかわいい名前！」

りんどう、鋭い眼光を更に鋭くして誠を睨み付ける。

誠はおどけて「コーワァー！でもそこがコーわァーいーいー！」と少女を逆上させる。

「あらあ、殺しちゃダメよ。気持ちに分かるけど」

女はりんどうの頭を軽くなでて彼女の凶行をいさめる。

「坊や、女の子と付き合いたかったらもつとデリケートに下手に出なくちゃダメよ。りんどうちゃんってガサツで暴力的でいかにも男勝りって感じだけど、耳にリボンの付いた真っ白い猫のぬいぐるみとかネズミのマスコットが大好きで夜ベットに無いと眠れないぐらい繊細な、典型的ツンデレ乙女ちゃんなんだからあ」

「馬鹿ーっ、馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿、サツキさんの馬鹿ー！」

かと思いきや、誠にりんどうのプライベートを暴露するサツキ。

りんどうの白い肌が真っ赤に紅潮するのを見てサツキは満足そうな笑みを浮かべる。

「いいじゃないのお、将来の旦那さんなんだから。ねえ、エーとお……」

「誠です、お姉さん！鈴木 誠」

「私のことはサツキって呼んで、誠ちゃん。神崎 サツキ。顔に似合わず真面目な名前ねえ」

「えへへ、真面目ですよ俺」

誠に満面の作り笑いをするとサツキは踵を返す。

彼女の視線の先には先程まで生きていた化け物。

サツキは深呼吸すると細い両腕を前に突き出す。

すると、りんどうが周囲に貼り付けていた札が淡い紫色の光を帯び周囲を明るく照らし出した。

「何々、すっげーキレーなんっすけど！」

「黙れ馬鹿」

「あれ、りんどうさんあの剣はどこに？」

「消した」

壁により掛かり深いため息を吐くりんどう。

彼女もまた、光に包まれていた。

そして誠も。

「じつとしててねえ、特に誠ちゃん。今お姉さんがクリーニングしてあげてるのよお」

見れば化け物の遺体も光に包まれている。光は小さな結晶に分かれると砂時計を逆流したように空中に消えていった。

飛び散った内臓も、地面や壁、二人の男女にかかった血液も光となって空へ消えていく。

沢山の光が空へと消え、それが終わった頃には先程までの凄惨な現場は元の姿を取り戻していた。ただ一つ、化け物が着ていた衣服だけが現場の生々しさを無言で語っているようだった。

「さて、後片付け終了。帰っていいわよお、りんどうちゃん。それと…」

ふわり、鋭さを隠しそれでいて相手を射貫く視線が誠を捕らえる。「誠ちゃんを連れ帰るのを、お忘れ無くねえ」

1（2） 家出少年

静けさを取り戻した現場にはもう誠とりんどうは消えていた。

サツキの指示で二人は数十分前に迎えの車で帰らせた。ただ一人、彼女を残して。

啜える煙草の煙がゆったりと宙を泳ぐことに関心を示さず、ただ一点を見つめているサツキ。

恐らく誠は、ここ数ヶ月街で起きている吸血蜥蜴を原因とする事件の被害者なのだろう。化け物から人を助けることはサツキ達にとっては仕事の一つ。つまり、日常だ。

だが、誠にとってサツキ達の日常が通用するのかと言えばそうではないはずなのに

「催滅導師」

「あら、ライカちゃん」

現場の入り口を塞ぐように黒い女が立っていた。

松下 ライカ。右目にだけ眼鏡をかけているのが印象的な全身をブラックスーツでまとめた女。

「遅かったじゃないのお。もう少しで帰っちゃうところだったわあ」

「真夜中に呼び出す非常識に付き合ってやっているのだ。さつさと地べたに這いつくばって感謝しろ、雌」

「睡眠不足は、お肌が悪いのよねえ。深夜料金請求していいかしらあ」

「お互い様だ」

ライカが手を差し出す。その手にサツキが血糊のべったり付いた警察の制服を乗せる。ライカは眉一つ動かすことなく手持ちのバツクにそれを詰めた。

「十日前から警察官が一人、行方不明となっているが制服だけ出

てくるとはな」

「本物ってコトお？」

「調べれば判ることだ。だが、恐らく……」

「物騒な話い。」

ねえライカちゃん、私お巡りさんが行方不明って初めて聞いたんだけど」

「だから何だ」

「そーゆーコト、ちゃんと教えてくれなきゃだめよお。」

私達、お巡りさん殺しちゃったかと思っちゃうでしょお？」

「今情報が繋がったのだ。警察官が一人行方知れずになつてすぐに事件と結びつくと思うのか？」

思考の短絡さに虫ずが走るな。

有益な情報とは精査してこそ価値があるのだ、馬鹿め」

ライカは遠慮無しに罵詈雑言をサツキに放つ。

彼女とは長い付き合いだが、よく自分がライカを消していないものだと言は不思議に思う。

まあそれというのも、それだけ長い付き合いだったりするからなのだが。

「じゃ、情報好きなライカちゃんにプレゼントねえ。」

その吸血蜥蜴に襲われていた少年を保護したって報告はしたわよねえ。その彼のこと」

「鈴木 誠のことか？」

「彼、救出されたとき気が触れることも怯えることもしなかった。血まみれの現場で、余裕があるって感じだったわ。」

ただの高校生が持てる神経とは思えないんだけどねえ」

「興味深いな。明日その少年の調書を改めて報告してくれ」

「あら、ライカちゃん動かないのお？」

ライカは眉間にたまったシワをほぐすと深いため息を吐く。

「催滅導師よ、私は確かに貴様ら防人のバックアップを行ってはいるがそれが仕事の全てでは無い。他にも抱えている案件は山のご

とくだ。

貴様等で出来ることを私がするなど、無駄」

「でも、動きたくなってんじゃない？」

悪戯っぽくサツキがライカの顔をのぞき込む。一瞬、ライカの頬に赤みが差すがすぐにサツキから視線をそらして声を荒げる。

「黙れ雌！」

戒の分際で私の手をこれ以上煩わせるな」

踵を返すとライカはそのまま、夜の闇に消えていった。

サツキは小さく微笑むと新たな煙草に火を付ける。

独特な香りが口の中に広がり、心を落ち着かせる。

「女王様になりきれていないところが、ライカちゃんなのよねえ」
尊大で横柄。全身を黒で固めた彼女には悪辣な言葉使いも様になるが、何処か必ず小さな隙を見せる。

彼女のその隙こそが、サツキがライカを嫌いになれない理由なのかも知れない。

「誠ちゃんかあ」

あの戯けた少年を思い出す。

吸血蜥蜴の被害者。只それだけの人物として接していいのだろうか。

只の人間として。

「なーんか、隠してるっぽいよねえ」

不吉な予感がするのは確かだ。

それでも、りんどうとまともに話をした少年に期待を抱く。
りんどうの抱えた柵を、あの少年なら少しは和らげてくれるかも知れないと。

ふわりと、風のない空に紫煙が舞った。

緩やかな斜面を切り開くようにその屋敷は建っていた。

石垣で組まれた塀に囲まれた日本庭園は広く、ご丁寧に錦鯉まで飼われた池からは鹿威しの涼やかな音まで響いている。

「すごっ」

思わず誠は黒塗りの高級車の中で息を止めた。

「ご、ご到着です。りんどう様、鈴木様」

ドライバーの言葉にりんどうは無言で車から降りる。

「鈴木様？」

運転席からヘッドドレスを着けた女性が誠を見つめる。

黒のミディアム丈のドレスに白のエプロン。

しかも三つ編みお下げまでしたメイドさんとは、気合い入りすぎなドライバーではないだろうか。

「あ、降ります。すぐ降ります！」

場違いと言うより、世界が違う。

威厳の塊のような木造二階建ての屋敷と、漆喰で作られた倉。

電線とTVアンテナがなければ江戸時代にタイムスリップした感じを植え付ける造りだ。

一体どれだけの資産があれば都会の一等地に建てられる屋敷なのか。誠の頭では想像出来ない。

車庫付けを済ませたメイドが庭を眺めていた誠に駆け寄ってくる。

「すいません、鈴木様。今お部屋にご案内いたしま、きゃっ！」

石につまづき堂々と正面からすっ転ぶメイド。

アニメでしか存在しないキャラかと思っていたが居るところには居たらしい。

「えーっと、ご出身は二次元ツスか？」

起き上がるとメイドは照れくさそうに「えへへっ」と笑った。

「ちよつと違いますけど、そんな感じでございます。」

よく、分かりましたね」

軽く肯定されてしまった。

謎が謎を呼ぶ物言いとも言えるが…

メイドは土埃を払うと、スカートの裾を軽くつまみお辞儀する。

「この世界では各務 鏡子と申します。平行世界から迷い込んだ戎でして、サツキ様の御計らいもあつて鎌田様御一家の使用人を仰せつかっているんです」

満面の笑みを向ける鏡子。

平行世界？

戒？

訳の分からない単語を平然とお下げのメイドは口にしていた。

誠の間抜けな顔を見て気付いたのか、鏡子が慌ててフォローする。

「あつ、ごめんなさい！ごめんなさい！

普通の方にこんな事言つても分かんないでしたね。

夜も遅いですし、お疲れでございましょう。

お部屋へご案内いたしますです」

そう言うや、鏡子は誠のナイロンバックを手にして屋敷へと案内をする。

ふと、誠は辺りを見渡す。

「あの、りんどうさんは？」

下車して以降、彼女の姿が何処にもいない。

屋敷に入った形跡も見られないのだが。

「お嬢様は離れに帰ったのでございましょう。

ここ最近はずっとそうしていらっしゃいます」

「離れ？

こんな大きな家があるのに？」

「お嬢様なりのお考えがあるんですよ」

と、鏡子は笑った。

庭園には離れと呼べるようなものは倉しか見当たらない。

とすれば、りんどうはあの倉で寝泊まりしているというのか？

小さな明かり取りの窓しかない、牢獄のような建物の中に？

「あれ？」

倉の扉の前に、人が立っていた。

背は誠より頭二つ程低いジャージ姿の子供。

扉をノックするでもなく、ただ立っている。

「鈴木様」

鏡子がそつと声を掛ける。

「鎌田 あおい様。りんどうお嬢様の弟様です」

「いいの？」

「こんな夜中に子供が起きてて」

「今は、えつと…」

そつとしておいて、あげてくれませんか？」

鏡子は笑みを絶やさずに誠を制止する。

仮面のように張り付いた笑みで。

すぐに誠は部屋に案内された。

畳敷きの室内で鏡子が手際よく布団を用意する。

が、

「鈴木様？」

ばたんつと誠はそのまま地面に突っ伏して深い眠りに陥っていた。

今までの疲れがどつと出たのだ。

慣れない疾走に誠の身体は悲鳴を上げていたのに今の今まで緊張

とストレスで気付かないでいただけ。

寝息を立てる誠に、鏡子はそつと毛布を掛けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4041z/>

逃走中のモラトリアム

2011年12月20日20時52分発行